源氏物語「本文と享受」の方法（Ⅲ）

岩下光雄

（Ⅰ）

一、「面影」の語誌と物語の享受（Ⅰ～Ⅲ）

二、『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受（Ⅰ～Ⅱ）

三、『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）要旨・享受をめぐる問題(Ⅰ)

（Ⅱ）

二、『首書源氏物語』玉鬘の巻の本文と物語の享受（Ⅲ～Ⅳ）

（Ⅲ）

三、『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）要旨・享受をめぐる問題(Ⅰ)　付(Ⅰ)・付(Ⅱ)

付(Ⅰ)・「おのがいとめでたしと」再論

夕顔の巻の物怪の詞は、謎めいた怪異な表現である。「おの」という自称の語に、若い女性が用いない位相差を指摘され、六条御息所の面影を帯びているという今井源衛氏（「おのがいとめでたしと考」『源氏物語とその周縁』（和泉書院）所収）のご指摘は、確かに説得力をもつ論証のように思われ、お教えいただくことの多いご論であった。しかし、

なお再論、検討を加うべき問題もあるように思われる。『日本国語大辞典』（小学館）は、「おの［己］『代名』」の項に、「（反射指示）その人、またはそのもの自身をさす語。自分。」として『記』「意能（オノ）が命（を）盗み死せむと」などを語例にあげる。次に「自称。われ。」として、『落窪』「まだ幼くておのがもとにわたり給ひにしかば」などを語例にあげ、「補注」で「助詞「が」を伴うか、あるいは体言に直接冠した形で用いられ、独立しては用いられない」と注記する。中田祝夫氏編『新選　古語辞典』（小学館）は、「おの―が（己が）［連語］」として、「①主格。私が。自分が」として夕顔の巻のこの語例を引く。「②連体格。私の。自分の。」として葵の巻の「おのが顔のならむさまをも知らでゑみさかえたり」を語例に引く。格助詞「が」を伴ったり、体言に直接冠した形で、「連語」として用いられる「おの」には、既に自称の代名詞として形骸化した一面が見られるのではないか。『新選　古語辞典』の語意の説明は、まがうことのない明解なものになっているが、そういう二極分化した形では律し得ない語意が存在するようにも思われる。夕顔の巻の物怪の詞の語例も、やはり「主格」としては律しきれない連体格の語意を持つもののようにも思われる。

平安時代における「ふみ」「ことば―いふ」「歌―よむ」の関係を記述したかと思われるものに、『伊勢』の次のような章段がある。

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばもいひしらず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案をかきて、かかせてやりけり。めでまどひにけり。さて男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし

返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼まむ

といへりければ、男いといたうめでて、いままで、巻きて文箱に入れてありとなむいふなる。（小学館『全集』224頁 百七段）

また、『大和』にも次のような章段がある。

女、「ぬしに消息聞えば申してむや。文はよに見たまはじ。ただことばにて申せよ」といひければ、「いとよく申してむ」といひければ、かくいひける。

「ふねもいぬまかぢも見えじ今日よりはうき世の中をいかでわたらむ

と申せ」といひければ、男にいひければ、物かきふるひいにし男なむ、しかながらはこびかへして、もとのごとくあからめもせで添ひゐにける。（小学館『全集』408頁　百五十七段）

さらに、『源氏』には次のような一節がある。

薫「不軽の声はいかが聞かせたまひつらむ。重々しき道には行はぬことなれど、尊くこそはべりけれ」とて、

薫 霜さゆる汀の千鳥うちわびてなく音かなしきあさぼらけかな

言葉のやうに聞こえたまふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答へにくくて、弁してぞ聞こえたまふ。

中の君 あかつきの霜うちはらひなく千鳥もの思ふ人のこころをや知る

似つかはしからぬ御かはりなれど、ゆゑなからず聞こえなす。（小学館『全集』総角　312頁）

『伊勢』、小学館『全集』の現代語訳は、「手紙もしっかり書けず、恋の言葉のあらわし方も知らない、まして歌は詠まなかったので」とする。竹岡正夫氏は、「男からの返事の手紙は勿論書けないし、代筆してやるにしても、返事を

口頭でどう言ってよいか分からないのである。」（『伊勢物語全評釈』右文書院1448頁）とし、「「ことば」を手紙の文句のように解しているがいかが。次の例のように口頭で言う言葉と解すべきであろう」とその「釈」に注記する。「次の例」とは、『大和』百五十七段を指す。『全集』の福井貞助氏は「ことば」を「手紙の文句」と解され、竹岡氏は「口頭で言う言葉」と解されるのであるが、この語の意味はもっと別の角度から、視点を変えて検討すべき必要があるように思う。

「消息」の意味は、一般的には「手紙、たより、文通」「訪れること、来意を告げること」の意に解されているが、『大和』は「文」や「ことば」で「消息」が伝えられることを記述している。「ただことばにて申せよ」「かくいひける」「……と申せといひければ」「いひければ」と続く叙述を追い「……」の部分が和歌になっていることを考えると、『伊勢』百七段に見られる基本的な形態だけでは律し切れない問題が存在する。『大和』百五十七段は、和歌が、「ことば」として「いふ」ものであったことをも示している。『源氏』総角の巻の用例も、『大和』のそういう形態を実証する記述である。今井氏が、「会話と地の文、あるいは和歌とは表現の位相を異にする」（『源氏物語とその周縁』和泉書院　11頁）と指摘されるのは、基本的には妥当な見解と言えるが、それだけでは律し得ない和歌の享受についての問題が存在することを、『大和』や『源氏』総角の巻の記述は反証しているように思う。

時枝誠記博士は、既に『古典解釈のための日本文法』（至文堂）の「韻文散文の混合形式の意義」の項で、次のように指摘されている。

韻文は散文とは別の次元のもので、登場人物の言葉であり、従って、それは近代小説における会話の部分に匹敵するものである。（228頁）

源氏物語の和歌が、会話性を持ってゐるといふことは、恐らく当時において、和歌の持ってゐた一つの性格の反映であると見られる。叙事、抒情の表現としての和歌の観照性は、勿論万葉集にも見えて、事新しく云ふまでもないことであるが、和歌が会話性を持ってゐるといふことは、換言すれば、和歌が日常言語の延長であり、その特殊の形態であるといふことは、日本文学としての和歌の特殊性とも云ふことが出来るものであり、和歌の制作と鑑賞とが、常に民衆生活（専門歌人以外の）と密接な交渉を保って来た理由がそこにあると考へられる。（223頁）

和歌の会話性といふことは、和歌が単にある事件の叙述や、感情情緒の観照として成立するばかりでなく、日常の対人関係から起こる一切の言語表現の持つ機能、例へば、怨恨、嫉妬、求愛、訓戒、勧誘、懇願、慶弔等の表現を持つことであって、そこに人間的交渉の色彩を多分に持ってゐることを意味するのである。従って、和歌が会話性を持つといふことは、それが芸術的批判の対象となる前に、生活の手段としての実用性を多分に持ってゐるといふことである。（223頁）

『大和』や『源氏』総角の巻の記述は、やはり、時枝博士の立論を実証するものとなっているように思われる。この立論を踏まえながら、松田武夫氏（『平安朝の和歌』有精堂）は、さらに次のように論を展開されている。

源氏物語の和歌は、物語自体が虚構性を持つが故に、作中の和歌も自然虚構性を有すること。また、和歌自体が会話性・独語性といった思想伝達の場における一般言語性に等しい性質と機能を有するが故に、それが物語作者によって、作中にたくみに利用されていること。更にまた、和歌が短詩型なるが故に、集約性を有しているがために、物語の文章表現の過程で、この性質を利用し、文章を盛り上げ、あるいは前後を巧みに接続させる契機を果たさせること

など、和歌による表現効果を作者は意識しつつ、源氏物語全般に、この重宝な表現上の武器を、行使したと解されるのである。(67頁)

和歌が会話語の資料にはなり得ないという論点や心中語もはたして通常の会話と同様に扱ってよいものだろうか、疑問なきをえないという今井氏の論点は、確かに疑問を挿しはさむ余地のない明晰で、説得力を持つ論理のように思われる。それは、久保田淳氏(「〈うた〉、そのレトリックを考える」『国文学』元年11月号　学燈社)が、「少なくとも平安の歌の場合には、歌ことばと話しことばは違っていると思います」以下のご指摘と「定型である以上は、歌であるからには、歌のことばでなくちゃというのが平安の人たちの基本的な考え方だったと思います。」(16頁)と言われるのと一般である。だが、平安時代の物語の文章表現に見られる一つの混沌と創造ともいうべきものは、一般的に近代文学の小説などから帰納されるような方法では割り切れない、律し難い複雑さを持っているように思う。話しことばと書きことばとの間に大きな区別がなかったというのも、このような混沌と創造とを持っていたからだという論点を欠落させては考えることができないように思う。会話文と地の文、和歌というように、その表現の位相を異にするものとして、明確に識別しなければならない意識が存在していたのだろうか。それは確かに存在していたが、一つの混沌と創造とが見られるというのも事実である。

山口明穂氏(「言語生活としての和歌」『国文学』元年11月号　学燈社)は、

言文不一致となった鎌倉時代以降とは区別され、平安時代は、言文一致であったといわれる。和歌の言葉も、日常の会話と違わなかったことが予想される。『土佐日記』承平五年二月五日の、「かぢとり」の「あさきたのいでこぬさきに、つなではやひけ」という「おのづからのことば」が、そのまま和歌の形になったような、ふと口に出した言葉がそのまま和歌となるという例があり、同種の例が他にも見られることは、その予想が間違いでないことを考えさ

せてくれる。後の時代になると、和歌を作るには種々の学習が必要となった。それに比べて平安時代には和歌はもっと日常的であったと考えられるのである。『宇津保物語』（藤原の君）に「艶書の和歌なきは、人あなづらしむるもの」とあるのが知られるが、男女間で取り交わされる手紙に、和歌がなければならないというのは、それがいかに日常的であったかを物語っている。（64頁）

和歌は心を打ち明ける。それは、当時は和歌だけがもったもので、生活の中で実用性の高い言語行為であったのである。このような働きを和歌が果したのは、和歌の表現が当時の人の心にぴったりと合ったからで、それは、説明的でなく直接的である、理にかたず、現実をありのまま捉える、和歌の特性によるものが大きかったと考えられるのである。（65頁）

と指摘されているが、既に長い引用で示した時枝誠記博士の立論を踏えられた確たるものであることは、また疑問をさし挿む余地がないように思われる。

既に引用した松田武夫氏の論の展開、山口仲美氏（『平安文学の文体の研究』明治書院）の次のようなご指摘も、やはりこの基調を離れては存在しないように思う。

源氏物語は「女房語」を基にし、和歌に依ること大なるに拘らず、よく和歌を脱却しえたのは、作者の人生体験、その人生を見つめる真摯なる眼の賜物である以外に、この漢字の素養が与って力あった、と思う。玉上琢弥氏の「源氏物語のことば」の一節であるが、源氏物語の文章を全円的にとらえた卓見である、と思う。

おおよそ、すぐれた文章というものは、それまでの伝統的な側面を吸収し継承しつつも、独自の新しい側面を包含しているものである。源氏物語にあっては、伝統的な和歌の世界の表現法を存分に吸収しながらも、新しい散文とし

ての文体を獲得していったものととらえることができる。散文としての源氏独自の文体は、当時の日常談話語（玉上氏のいわれる女房語とほぼ同じ）を基調としながら、漢文の凝縮した表現法をとり入れ、創り出していった、と大まかには言えよう。その軌跡については、清水好子氏のすぐれた論考「物語の文体」を参照されたい。

こうした巨視的な方向が、ほぼ見定まった現状において、「文体論の新しい課題」というのは、継承面や創造面が、具体的に、いかなる言語事実となってあらわれているのか、といった言語の側からの検証にあるといえよう。（169頁）それは、秋本守英氏（「仮名散文と歌ことば」『国文学』元年11月号　学燈社）が、「大きい流れとしてみると、王朝貴族の日常語を基調として出発した王朝仮名散文は、和歌の用語・表現を種々のかたちで積極的にとり入れながら文学言語としての自立・完成をめざし、古今和歌集から新たに出発した王朝和歌は、仮名文の素材に時には目を開かれた時には依拠しながら徐々に新しい世界を開拓していった」（74頁）と言われることについても一般である。

今井氏は、『竹取』、『伊勢』以下八物語、『土佐』以下四日記を既刊の語彙索引によってつぶさに調査されている。最も古い例としてあげられた『大和』百四十八段、芦刈の話に「おのれひとりまからむ」とある例。「女はかなりの年配と思われる」と言われるがいかがなものであろうか。主観的、相対的な問題もあろう。「女のかく若きほどにかくてあるなむ、いといとおしき」、「さてとかうさすらへて、ある人のやむごとなき所に宮たてたり、さて宮仕へしありく程に、装束きよげにし、むつかしきことなどもなくてありければ、いときよげに顔容貌もなりにけり。」「かかる程に、」「人知れずおもふこと一つなむありける」と続く時の経過のなかに、「かなりの年配」を読みとるべきかどうかは、相対的な微妙な問題もあろう。阿漕の叔母の和泉守の北の方を「かなりの年令」というのも、やはり相対的な問題があろう。阿漕が「おのが方ざまに物いふ」と言うのは、会話中の生きた自称代名詞ではないし、「自分勝手に」の意であるが、若い女性が使っても不自然ではなかったから、そういう言い方がなされていると解すべきではないだろうか。僧

や男子、老人などの自称として限られた位相にしか現われてこない語は、それが連体格や連体詞、連語のように用いられていっても、表現の場になじみにくい、ある違和感を生ずるものだと思う。これらの語は、若い女性にも用いられ、なじみにくさや違和感というような意識は伴っていないように思われる。

拙著『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）で、若い女性に対して「おの」の語が用いられている語例としてあげたものは、次の七例である。吉沢博士『新釈』本による。

(1)若き人々、「いでや、おのがどち引き忍びて見侍らむこそはえなかるべけれ（葵327頁）

(2)若き人々は、所々に群れゐつつ、おのがどちあはれなる事どもうち語らひて（葵369頁）

(3)おのが心をやりてよしめきあへるも、うとましうおぼしけり（澪標131頁）

(4)おのがどちの心より起れる懸想にもあらず（若菜上306頁）

(5)大空の風に散れども桜花おのがものとぞかきつめて見る（竹河403頁）

(6)峰の霞を見捨てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにはしたなく人笑はれなる事もこそ（早蕨201頁）

(7)風の音もいと荒ましう霞深き暁に、おのがきぬぎぬも冷かになりたる心地して（浮舟107頁）

これらの語例は今井氏の前提に立つ限り、会話文中の主格表示の例は、ご指摘のように一例もない。しかし、既に述べてきたように、その前提に問題があるように思われる。視座を少しずらすと、七例には自称の言い方こそ見られないが、(1)、(5)の二例は会話文や和歌に用いられたもので、自称表現に準ずべき類例と考えれば、そこには、若い女性が用いない位相語としてのなじみにくさや違和感はみられないように思われる。『新編　国歌大観』（角川書店）による次の諸例も主格表示ではなく、連体格表示であるが、それらの類例として加えることができる。

(1)こころみにおのが心もこころみむいざみやこへときてさそひみよ（和泉・59）

(2)のぼりえぬ山をたかしと思ふなよおのがさかゆく時もある世に（弁内侍日記・223）

さて、夕顔の巻の物怪の詞は、次のようにみえている。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女ゐて、「おのが、いとめでたしと見たてまつるをば、尋ねも思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさんとすと見たまふ。（小学館『全集』238頁）

今井氏は、「この物の怪が某院にすむ悪霊であるとともに、御息所の面影を帯びていることは、私には疑えないように思われる」（11頁）と指摘されるが、「をかしげなる」語に注意すべきである。「いとをかしげなる女」は、従来「実にきれいな女」（玉上『評釈』）「たいへん美しい様子の女」（『全集』）、「ひどく美しげな女」（岩波『大系』）などと訳されてきたが、それについては拙著『源氏物語の本文と享受』（和泉書院）で82頁から103頁に亘って祥細に論述し、「源氏物語「本文と享受」の方 法(II)」（信州豊南女子短期大学紀要　第6号）に要約した。重複するが引用する。

この語の形容動詞としての扱い方や意味を、七種類ほどの「辞書」に当たって比較、検討する。大野晋博士の形容詞の語源説を辿りながら、形容動詞に転成する場合、形容詞の意味の一部分が用いられていく類の語ではなかったかと推定する。『新釈』本索引によって検索し得た百七例について調査の結果を分類する。「誰」・「何」に対して用いられているかを個々について分析し、「第一類、女性の登場人物に対して用いられているもの」から、「第四類、物について用いられているもの」までを一覧にまとめた。この調査を通して明確にいえることは、「をかしげなり」という語が、従来、単に「かわいらしい」「いかにも趣がある」「魅力的だ」などの意味を表わすものと見られ、物語のなかで、それほど注意されて読まれてこなかったのではないか、ということである。「第二類」の、この語が用い

られている男性の登場人物は、源氏、夕霧、匂宮、薫の四人に限られている。「第一類」の、女性の登場人物も、浮舟、中君、紫上、朧月夜、玉鬘、雲井雁、女三宮、葵上など、ごく限られた主要な人々についてのみ用いられている。やはり、作者の、したたかな用語意識によって繰られた語であったことは、既に指摘したことではあるが、夕顔の巻の「童のをかしげなる」(『全集』211頁)、「をかしげなる侍童」という、意図的に、対遇的に構成された二つの物語の場面に、意識的に用いられている語であることからも明かである。それらの語例を検討しながら、この語が、六条御息所に対しては用いられない用語であったことを論証する。「をかしげなり」が、登場人物に対して用いられる場合、魅惑的、魅力的な妖艶さや、いかにも趣がある様子などの意に用いられていると見られるものも確かに若干は存在するが、一方、どうしてもそのように解さなければならない用例は、きわめて少ない。物について用いられている第四類の用例八例も、「葵374」「菜下3」などの二例は、やはり「かわいらしい」という意味をもち、形容動詞化していく過程では、形容詞「をかし」の語意の、こうした意味が「根本」となって転成していったものと思われる。(「紀要」43頁)

源氏物語に用いられている百余例の「をかしげなり」の用例を調査すると、児、童などに、「かわいらしい」という思いをこめて用いられているものが、二十五%近くあり、紫上に「若うをかしげなり」(玉399)、女三宮の尼姿に「うつくしき子供の心地して、なまめかしうをかしげなり」(柏木152)、その声を「若くをかしげなる」(菜下70)、夕霧の笛の音を「若うをかしげ」(ただし河内本などには「若ううつくしげ」とある)(少314)、夕霧に、「見る目は人よりけに若くをかしげにて」(菜上382)、源氏に「をかしげに若き人」(紅238)というように、そこはかとないあどけなさ、かわいらしい魅力、親しみ深い魅力などを表わす場合が多く、朧月夜の魅惑的、魅力的な美しさの中にも、そうした心情が深く秘められているように見える。そして、源氏物語の用例について調べていくと、そこに意味

の「根本」があるように思われる。

葵上に対する用例は三例であるが、桐壺の巻の終りに「大殿の君、いとをかしげに、かしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず覚え給ひて、をさなき程の御ひとへごころにかかりて」とあるのは、「たいせつに育てられた、いかにも美しげな人だと思われるけれども」（『全集』）、「立派な人」（『評釈』）というように解されているが、そういう意味ではないと思う。かわいらしく、親しみを感じさせる魅力を期待していた、そこに光源氏の女性に対する一つの理想があったけれども、意外に取りすましているところが気に入らなかったというのである。大臣家の娘として、大切に育てられた姫君だから、おおらかな、かわいらしげな人だと思われる、一見、そんな風に見えるのだが、というので、葵上は現実には「をかしげなる」人ではなかったのである。源氏が姫君にそういう期待を抱くことが、実は無理なことだったのに。だが葵上は、臨終に当たって、はじめて心うちとけ、なごむ。源氏にうつし身の女性を感じさせる。葵上が「をかしげなる」人になるのは、出産の床、病床に臥す人になってからである。

いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へるさま、よそ人だに見奉らむに心乱れぬべし。（葵344頁）

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの気色にて臥し給へるさま、いとらうたげに苦しげなり。（同、349頁）

このように読んでくると、葵上が「をかしげなる」人であったというのではない。葵上という一人の女性を通して、女の理想像の一面を「をかしげなり」として追求しようとしていたというべきだろう。それればかりではない。紫上や大君にも病に臥す人を「をかしげなり」と表現する。

限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いと仮初に世を思ひ給へる気色、似るものなく心苦しく、すずろに物がなし。（御法307頁）

御ぐしはいとこちたうもあらぬ程にうちやられたる、枕より落ちたるきはの、つや〳〵とめでたうをかしげなる

も、いかになり給ひなむとするぞと（総角181頁）

六条御息所は、「をかしげなる」女人ではなかった。だが、やはり臨終に近く、病床に臥すようになると、その尼削の髪が「をかしげ」で、絵に描いたようだという。ひとしお心にしみじみと感じるという。

心もとなきほどの火の影に、御髪いとをかしげに、花やかにそぎて寄りゐ給へる、絵にかきたらむさまして、いみじうあはれなり。（澪標235頁）

ここも、従来のように、ただ、美しいというのではあるまい。くっきりと尼剃ぎに切りそろえ、物に寄りかかっている、今は限りの姿に、普段の御息所とは違った、あどけなさ、ある親しみをもった深い魅力を感じる。あいよることのできなかった二人の魂が、斎宮の後見という遺言を通して、ともかくもあるなごみのひと時をもつ。それは、死に行く者への鎮魂の賦でもあった。このように読んでくると夕顔をうばった物怪に、光源氏も、物語の作者も、六条御息所とのかかわりは考えていなかったことがわかる。（『源氏物語の本文と享受』90頁）

今井氏が指摘されるように、夕顔の巻の六条御息所の年齢は二十四歳。「その人がらとしては、高貴で年令以上に熟した女性の印象がつよい」（11頁）と指摘されるのであるが、「をかしげなる女」が、六条御息所に重ねられ、その面影を帯びていると解されることを前提としての立論である。二十四歳の女性を若いとするか、どうかにはやはり微妙な相対さがある。しかし、六条御息所は「をかしげなる女」ではない。それは、某院にとどまる、あるいは六条御息所邸にとどまる若い女の怨霊であると考えなければならないことは、既にくり返し論述してきたし、この「再論」でも、旧稿を引用して述べてきた。『源氏』に用いられている「おの」の語をもつ連体格表示や連語には、若い女性には用いない位相差による違和感やなじみにくさは見られないし、「いとをかしげなる女」と「おの」との関係には、かえって若い女性が用いている積極的な意味での実証が見られる。会話と地の文、和歌との間に見られる諸相や実態を考えていくと、やはり今井氏らが指摘されるように、位相差を認めることは困難であるように思われる。その語の位相性を捉えて

いく場合、用例の場面性を一元的に、平面的に捉えていくことには、また、問題が存するように思われる。「べらなり」の位相性をめぐる吉田金彦氏（『日本文法大辞典』明治書院）と、松尾聡博士（『古典解釈のための　国文法入門』研究社）の見解には、次のような相違が見られる。

補説　「べらなり」は平安時代初期では訓点語として用いられ、男性系の口語として院政時代まで存したが、歌語として採用されて中期に興隆を見たが、長続きせずに亡んだ。鎌倉時代以後は急激になくなったが、それでも『金槐集』や近世俳諧に稀に見える、擬古的用法のものがある。「べらなり」は「めり」よりも断定的語感が強い。「べらなり」の「べ」音は破裂強声音で男性的な響きがするから、男性の和歌に用いられたのではないかとの見方もできる。これに対して、「め」は「べ」に比べて音が優美な感じがするから、「めり」は女性側に主として使われ、しかも長続きがしたのだといえよう。『万葉集』に「べらなり」はないが、上代に絶無であったと断言できない観がする。「べらなり」の意味と用法とは、「めり」および「べかんなり」と相互に比較・対照して考えねばならない。（761頁）

「べらなり」は前述のように「古今集」「後撰集」「拾遺集」など中古初期の歌集に見られるが、特に紀貫之は好んだらしく、「貫之集」「土佐日記」の歌などにもしきりに用いている。「後拾遺集」以後の歌にはほとんど姿を見せず、まして散文の仮名文学作品には中古初期からまったく見られない。中古の経文の訓点にわずかに見えるのをのぞけば、その後ははるかに院政期まで下って前掲の「今昔物語」の一例が見えるにすぎない。これによって推測すると、この「べらなり」は中古初期に発生した流行語（口語）であって、それを新生の歌壇の総帥であった紀貫之が、その新しさのゆえをもって敢えて歌に採り入れて、大いに新生和歌の撥剌さを誇示したのではなかろうか。その後、歌壇が安定するに伴い、再び保守的になって雅語を尊び、俗な流行語などを排する気持ちから歌には用いられなくなったが、たまたま中古初期にこの語の流行した当時、経文の訓点に用いられたものが、その後も僧の間には古訓点とし

てうけつがれて、院政期の僧のことば（前掲の「今昔物語」の例は横川の中堂の導師の祈禱の終りの教化のことばである）に発せられたのであろう。（116頁）

「べらなり」は歌語であったのか、口語であったのか、位相語という捉え方そのものにも問題があり、その用例の実態とはまた別の論点の違いが存在するのである。

次に、「めざまし」の語をめぐる問題、生霊譚をめぐる問題について、旧稿を一部補訂を加えて引用する。

最後に残された問題は、「めざまし」に、「卑者を見下す階級的意識を潜める場合が多い」という指摘と、夕顔の巻に六条御息所の物語が、対偶的に語られている意味をどのように考えるべきかということである。『新釈』本の索引によって検索し得た「めざまし」の語例六十八例について、「第一類、心外だ。気にくわない。あきれたの意に用いられているもの」、「第二類、目がさめるほどすばらしい。りっぱだの意に用いられているもの」に分類し、その用語例を、誰から誰に対する思いであるかを一覧にまとめた。形容詞「めざまし」は一般に辞書類では、第一類、第二類で分類した意味に従って説明されている。ところが、三省堂『新明解』、小学館『古典辞典』などは、『全集』頭注の「卑者を見下す階級的意識」の意味を注記する。源氏物語の全用例を通じて、この注記にはみ出すかと見られるものは、第一類、第二類を通じて、ほぼ一〇％弱で、その他はいずれもこうした語意を伴うように見える。但し、第二類の「目がさめるほどすばらしい。りっぱだ」の意味に用いられているのは六例中、三例までが注記にはみ出すかと見られ、五〇％に達する。褒める場合には、比較的身分や年令などに関わりがなかったようにも思われる。注記にはみ出すかと思われる六例について、検討を加えながら問題点を要約していくなかで、物怪の詞に、何か笠に着た権高な言い方を感じとるのは、きわめて自然であることを指摘する。怨霊説によれば、六条御息所その人であることになるが、また別の考え方もできる。さらに、物怪の詞、「いとめでたしと見たてまつるをば」の解釈について、『花鳥余情』以来の諸注、現代の注釈書を比較、検討し、「をば」を格助詞「を」の強調的表現とし、「めでたし」

の対象を六条御息所と解すべきことを論証する。源氏は、その良心に六条御息所に恨まれるのも道理だと心の負い目を感じてはいるが、夕顔を取り殺す物怪に、六条御息所のイメージを重ねてはいない。物怪の正体を廃院にとどまる可憐な若い女の怨霊としてとらえているところに、夕顔の巻の世界があるのだと考える。物怪の詞は、確かに六条御息所にかれがれな源氏の軽率をいましめている。権高に六条御息所を笠に着て源氏をさとす。物怪そのもの、その正体は決して六条御息所ではないのだ。夕顔物語は、もっと昔物語の世界に身を寄せているし、物語の主調音は、やはり夕顔その人の性にかかわるものであるように思われる。六条御息所の怨霊の回路は、そうした次元とは異なる世界にある。「光源氏は自己の「心の鬼」に気付かず、その無自覚性が、光源氏に、なにがし院の霊物という転嫁を創出させた」と解することは、確かに魅力ある新しい見方で、一見合理的のように見える。物怪の詞に、自己の良心を重ねて聴くという立場も、きわめて新しい、合理的で批判的な解釈である。〈一部省略〉

旧著では、「廃院に凄む若い女の妖怪」と考えてきたのであるが、夕顔の巻での源氏の言動が、物怪をよび込むようにくり返され、その詞が、六条御息所を笠に着て、権高に源氏をさとしていることを考えると、六条御息所邸にとどまり凄む若い女の妖怪、怨霊が、源氏の心の鬼によってたぐり寄せられていったと考えるべきではないか、という論に傾きつつある。補遺、訂正すべきものであろうと考えている。源氏物語は、骨格となる物語を書き変え、変容、変相の手を加えながら、謎解きのたのしさを味わい、享受されてきた作品であった。『紫式部集』の歌を通して源氏物語を享受できる読者達は、四十四、四十五番歌、「亡き人にかごとをかけて」、「ことわりや君が心の」の歌を通して、既に光源氏の「良心」を、その物語の対偶的構成を超え、表現のレベルで語られる世界をも超えて理解することができたはずである。物語の作者は、読者達に、主人公も知り得ない高い物語的世界の達成を知るよろこびを用意していたように思われる。そして、そういう読者達の理解を通して、より深い意味での変相、変容を、次の類型的物語で手がけ、典型を作りあげていく。源氏物語は、そのような語り方や享受によって、作られた作品でもあったこと

を論証する。（「紀要」第六号45頁）

『今昔物語集』巻第二十七は、「本朝付霊鬼」の部で四十五の話が集められている。それらの中には、「霊」、「鬼」、「狐」、「野猪」、「山の神」、「樹神」、「物の精」などが「霊鬼」の類として集められている。物語の編集方法は、雑然と集録されたものでなく、類型と照応とによる編集意識がかなり明確に示されている。巻第二十七の片々たる記録に、平安時代の霊鬼のすべての諸相が尽くされているわけではないが、問題に関わると考えられる部分について具体的に検討する。『今昔物語集』には、霊鬼、物怪について検討することも必要である。『紫式部集』四十四、四十五番に表現されている。こうした説話集から、物怪の災難を逃れ、克服する新しい価値観、人間観が既歌の「物怪」を、葵巻の生霊事件の物語構造という面だけから考えていくのは、源氏物語の達成と享受のなかに、「変相」と「変容」という「方法」を考えてきた筆者の考え方からすれば、片手落ちのように思われもする。『今昔物語集』巻第二十七「近江国の生霊、京に来て人を殺しゝ語第二十」の物語は、源氏物語の注釈書にも触れるところがなかったが、「心の鬼」「心の闇」としての「物怪」を考えていく場合、きわめて重大な問題を示唆する。南波浩氏（『紫式部集全評釈』　笠間書院）の「心の鬼」（266頁）についての論、大修館『大漢和辞典』、角川書店『古語大辞典』、小学館『日本国語大辞典』などのこの語の語意の扱いに注意する。『大成』索引により「こころのおに」「御こころのおに」十五例について、資料番号を付し、小学館『日本国語大辞典』の分類によって語意を指摘し、何に対してそう思うのか、誰から誰（何）に対してか、の三点について一覧に示す。南波氏の『評釈』、吉沢氏『新釈』と相違する「資料」⑿、⑾については、別に比較検討した。そして、全用例が、『日本国語大辞典』（小学館）の「①心を責めさいなまれること。ふと心をよぎる不安や恐れ。」「㋺心にかねて恥じ恐れていたことに直面してはっと思うこと。気が咎めること。良心の呵責。」という「①㋺」の意味に要約し得ることを論述する。但し「資料」⒁は

「①㋑」「①㋺」とも解し得る。「①イ」は「心の中で疑い恐れること、疑心暗鬼。取越苦労。」の意。物語の作者は、これらの語群を通して、微妙に、奥深い人間の心情のひだの隅々を表現しようとしているばかりでなく、当時の社会的状況、時代相を超えた高い倫理的感覚、道義的理想の表現を志向していたのではないかと推定する。これらの語群を「①㋺」の語意を主軸に繰る作者の用語意識の中には、物語文学としての高い次元での達成が見られる。「近江国の生霊」の話が、葵の巻の六条御息所生霊譚と符合することは、文末の評語「さは生霊と云ふは、ただ魂の入りてすることかと思ひつるに、早うつつに我も思ゆる事にてある」、「民部大夫が、妻にしたりけるが、去りにければ恨みをなして生霊となりて殺してけるなり」、「されば女の心はおそろしきものなり」、という三点から考えても理解できる。評語の第一点に注意し、確かに、巻二十七の中に同類の話がないことを見ても、特殊な生霊譚であったに違いない。葵の巻の六条御息所生霊譚は、『紫式部集』に見られる物怪についての高度な理性的理解、批評の精神というような一面的な「方法」だけで創り出されたものではない。「近江国の生霊」譚のようなものを原拠にしていうような一面的な「方法」だけで創り出されたものではない。「近江国の生霊」譚のようなものを原拠にして「変相」・「変容」の手を加えていったものだ、という面も考えなければならないのではないか。源氏物語は、深層読みにたえ得る作品として書かれただけではない。「変相」や「変容」による「方法」の美事さ、面白さ、たのしさを味わうこと、その種明しや、謎解きをしながら享受していくところに、物語を読むたのしさがあったのである。葵、若菜下、柏木の巻へと展開していく六条御息所の生霊、怨霊の物語の迫るような生々しさは、夕顔の巻の物怪出現の物語には見られない。それとは異質の物語的世界を創り出していくところに、意味があったからだと読んでいく必要がある。夕顔の死に、何らかの形で六条御息所の関与を認めるのは、定説化されつつあるが、そういう面だけにとらわれてはいけない。幻妖と怪異と浪漫に包まれたこの物語は、光源氏の心情と夕顔を取り殺した物怪が、誰であるかを重ねて読んでいくことを直接的には求めていない。ただ、『紫式部集』や説話集、さらに神話的伝承というようなものを通して、表現のレベルを超えた世界に、物語享受の視座を設定するという営みが必要であることは、既にくり

返し論述してきた所である。（同、53頁）

これらの問題は、また夕顔物語の構成という論点からも考える必要がある。今井氏は、手習の巻に、

「おのれは、ここまで参うで来て、かく調ぜられたてまつるべき身にもあらず、昔は、行ひせし法師の、いささかなる世に恨みをとどめて漂ひ歩きしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、かたへは失ひて、我いかで死なん、ということを、夜昼のたまひしに頼りをえて、いと暗き夜、独りものしたまひしをとりてしなり。されど、観音とざまかうざまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなん」とののしる。（『全集』283頁）

とあるのを、「ずいぶん年を経た悪霊である」とされるが、「ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるもいと恐ろし」（手習・『全集』271頁）というのは、夕顔の巻の物怪出現の場面と照応し、それを意識して語っている。浮舟の失踪は、人々には「狐木霊やうの物」「天狗木霊などのやうのもの」と、妖物のしわざと考えられていた。だが、浮舟をとり殺そうとした怨霊は、この世に執着を残して死んだ僧の怨念が、「よき女のあまた住みたまひし」宇治の八宮邸にとどまったものであった。それは夕顔の巻の某院にとどまる「女」の怨念、あるいは六条御息所邸にとどまる「女」の怨念に対応する「男」の怨念による死霊なのであった。六条御息所の怨霊も年を経て出現するが、霊界の怨霊は年をとっていくわけではない。「年を経た」ことは、年配になった意味ではない。手習の巻の物怪の詞に年取った年配の男のイメージを読みとることは困難である。若い男を連想していく方が「世に恨みをとどめて」「よき女の」という表現からすれば、自然ではないだろうか。やはり、そこには、夕顔巻との構成上の照応、対応が見られる。

重複と曲折を尽くしての論ではあるが、物怪の詞「おの」に若い女には用いない位相差を指摘し、六条御息所を直接的に重ねていこうとする考え方には、やはり従い難いのである。

付(II)「つれと」「つれづれ」の語をめぐる論

「つれづれと」「つれづれの」の語を句にもつ『古今和歌六帖』(角川書店『新編　国歌大観　第二巻』)の歌には、次の八首がある。

六二　つれづれと花を見つつぞくらしつるけふをし春の限と思へば
四六二　つれづれど袖のみひちて春の日のながめはこひのつまにぞ有りける
一三一〇　つれづれと年ふるやどはむまたまのよもひもながくなりぬべらなり
三五五八　つれづれとながめせしまに夏ぐさのあはれややどにしげりあひにけり
四五八　つれづれのながめにまさる涙河そでのみひちてあふよしもなみ
四六九　つれづれのながめにわれはなりぬめりつれなき空をふる心ちして
八二七　つれづれのはるひにまよふかげろふのかげ見しよりぞ人は恋しき
二〇七八　つれづれのながめにまさるなみだ川そでのみひちてあふよしもなし

「つれづれに」の形で次の一首が見える。

二六二三　つれづれになにかなみだのながるらんひとなんわれを思ふともなく

四五八、二〇七八番歌は藤原敏行の歌であるが、第五句に少し本文の異同がある。『古今集』恋歌三に「なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける　としゆきの朝臣」(岩波・大系224頁)として、下の句が「袖のみぬれてあふよしもなし」とある。『伊勢物語』第百七段に、

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よば

ひけり。されど若ければ、文もをさしからず、ことばもいひしらず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案をかきて、かかせてやりけり。めでまどひにけり。さて男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし

返し、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼まむ

といへりければ、男いといたうめでて、いままで、巻きて文箱に入れてありとなむいふなる。………（小学館・『全集』224頁）

とある。『古今集』、『古今和歌六帖』「なみだがは」（二〇七八）には「あさみこそ」の業平の返歌が『伊勢物語』と同じように続く。『古今和歌六帖』四五八番歌は「あめ」の部に、「としゆき」として出ている。このように『古今』『伊勢』『六帖』二〇七八番歌は、一連の贈答歌として扱われている。『伊勢』百七段は、更に二人が結ばれて後、業平の「かずかずに」の代作歌に感動した敏行が、「みのもかさも取りあへで、しとどにぬれてまどひ来にけり。」と後日譚を語る。ともに、業平の歌が恋の世界で果した功徳がどれほど大きかったかを語っている。歌物語として、やはり重い章段である。『伊勢』百七段の前半の贈答歌は「涙川」、「（袖）ひつ」を重要語と捉えている。『六帖』が「なみだがは」の部類に入れたのも理解できる。しかし、四五八番歌を「あめ」の部類に入れたのは、掛詞「ながめ・（もの思いにふける）（長雨）」からであり、「つれづれのながめ」の語が、またこの歌の重要な語句であるからにほかならない。業平の秀歌なるものを誘発した敏行の歌も、また秀歌であり、後半の敏行も「いちはやきみやび」心をもつ、情趣を解する風流人であった。「つれづれと」「つれづれの」の語を句にもつ『六帖』の歌が、八首も見られる事実は、やはりこの語句が詠歌の一つの類型的な発想をつくり出していったからでもある。

これらの語句を和歌にもつものとして管見にはいったものに、『大和物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』がある。それら、日記、物語の類に用いられている用例を少しく検討する。検索は、『国歌大観』第五巻による。

『大和』第六十五段「つひに行く道」に、

病もいとおもりて、その日になりにけり。中将のもとより、

つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずて暮らしてむとや

とておこせたり。「よはくなりにたり」とて、いといたく泣きさわぎて、返りごとなどもせむとするほどに、「死にけり」と聞きて、いといみじかりけり。(小学館・『全集』414頁)

とある。清和天皇の御時、帝が出家されてから、弁の御息所のもとに業平が人目を忍んで通っていた。病重く臨終の日に業平が御息所に送った歌で、この歌に続いて「つひにゆく」の辞世の歌を詠んで息絶える。定家本『伊勢』の終章、百二十五段に「むかし、男わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ」として、辞世の歌を伝えている。「あなたからのお手紙もいただけず、慰められることもなく、臨終の日を迎えてしまった。しみじみと寂しく時が過ぎていくなかで、ますます心つらく思い、悲しんでいる。」というのであるが、やはり業平の臨終に関わる重い章段の中で、「つれづれと」の歌が詠まれている。

『伊勢』と『大和』は、確かに歌物語としては、内容的に重い章段の中で「つれづれ」の語が歌に用いられている。だが、注意すべきことば、それらが表現する世界を異にすることである。『伊勢』は、「しとどにぬれてまどひ来にけり。」とある。それは巻頭初冠の段に、「心地まどひ」「狩衣の裾を切りて歌を書きてやる」、「いちはやきみやび」にほかならなかった。第百七段は、業平の歌が、恋の世界で果した大いなる功徳を語るとともに、情趣を深く解する風流人の「いちはやきみやび」をも語っていたのである。ところが、『大和』は、臨終の日を迎えたつれづれの時の中で

詠まれた歌である。病重く、すっかり弱ってしまっているが、弁の御息所への思いを、いよいよつのらせていく。そこには、恋に苦悩する業平像、絶ち難い絆と煩悩とにさすらう、恋に生きる業平像が描かれている。『伊勢』の、あの明るい、はじけるような色調は、そこには見られない。そして、「つれづれ」の語を歌にもつ日記や物語の章段は、それぞれこの二つの異なる世界を借景に、自らの世界を作り出していったように思われる。

次に『蜻蛉』上巻、応和二年、章明親王との贈答歌に、

六月ばかりかけて、雨いたう降りたるに、たれも降りこめられたるなるべし、こなたには、あやしきところなれば、漏り濡るる騒ぎをするに、かくのたまへるぞ、いとどものぐるほしき。

つれづれのながめのうちにそそくらむことのすぢこそをかしかりけれ

御返り、

いづこにもながめのそそくころなれば世にふる人はのどけからじを（小学館・『全集』159頁）

とある。兼家とともに、醍醐天皇皇子兵部卿宮章明親王と風流韻事に耽る交歓の一時は、「明るさが認められる」（市古貞次編『日本文学全史　中古』学燈社174頁）部分として、この日記の主題や本質とは、かなり違った異質の章段と見られてきた。木村正中氏は、

思うに、明るい素材の残存だとすれば、それは『蜻蛉日記』の作品形成のまさしく苦闘の跡といえるだろう。またこれらの明るい記事が兼家に対する執着を表すならば、それは喪われたものの回復の希求にほかなるまい。あるいは、構造論的に、それ自体としては明るく幸福な記事も、『蜻蛉日記』の中に位置づけられると、逆にその幸福がいかにもろく非恒常的なものであったかが照らし出され、彼女の人生の根底にあるはかなさが立体化されてくる、というふうにも捉えられる（前掲書　175頁）

とされ、「いづれにせよ、事実と対決し、事実を純化し、事実を内在化しながら、作品の世界に真実の人生を再現しようとするところに」『蜻蛉』の本質、主題があるとされる。ところが、古賀典子氏（「蜻蛉日記上巻の研究と解釈」有精堂『一冊の講座　蜻蛉日記』）は、「明るく幸福な記事の間合いには、例によって、秋冬はかなう過ぎぬ　と主題に沿って強いて挿入したと思われる文章で軌道修正がなされたり、年かへりてなでふこともなし。人の心のことなるときはよろづおいらかにぞありける。「年が改って特別なこともなく、兼家がいつもと違って優しい時はすべてが平穏でした」、だから、この日記の方もついに主題から逸脱してしまいまして、と、弁解している趣きの文が入れられたりしていることを忘れてはならないだろう」（62頁）と指摘される。この二つの考えのなかには、事実の認識においてあい入れない面も存在する。軌道修正や弁解の語句に作者の意図をより強く読み取るか、明るく幸福な記述の中に作者の意図をより強く読みとるかという遥れの問題ではあるが、恋の思いを揺曳させる風流韻事に、『古今』六一七、六一八番歌、『伊勢』百七段、『六帖』二〇七八、二〇七九番歌など、一連の贈答歌をふまえ、それを重ねているように思われる。

話型の構想力、主題化というような研究の亜流の徒からは見落としがちではあるが、類似する語句や語誌を民俗信仰を通してたどり、対偶的に物語を構成、主題化していく物語の方法を読みとること、作者の意図や謎を読みとっていくことも、物語研究の一つの方法であることを知らなければならない。それは、物語の享受の方法であり、物語はそうした享受にたえ得る作品として語られ、書かれてきたからでもあった。『伊勢』百七段を借景に、章明親王と『蜻蛉』の作者は風流韻事に耽り、その物語を享受しながら、自らも演技していたのだと考えなければならない。

次に『和泉式部日記』、小学館・『全集』「［一八］宮邸入り前の期間――愛の情景」を引用する。

心のどかに御物語起き臥し聞こえて、つれづれもまぎるれば、参りなまほしきに、御物忌過ぎぬれば、例の所に帰りて、今日はつねよりもなごり恋しう思ひ出でられて、わりなくおぼゆればきこゆ。

女 つれづれと今日数ふれば年月の昨日ぞものは思はざりける

御覧じて、あはれとおぼしめして、宮「ここにも」とて、

宮 思ふことなくて過ぎにし一昨日と昨日と今日になるよしもがな（137頁）

この部分が、「宮邸入り」という和泉式部の一つの決定的な生き方を決意する愛の情景であり、きわめて重要な章段であることは、説明を加えるまでもない。そして、『蜻蛉』と同じように、『伊勢』百七段を借景に、恋の情趣の世界にひたり、物語の女主人公となって、愛の情景に耽溺し、その物語を享受していたのではないかと考えられる。

『源氏物語』には、明石、幻、浮舟の三帖に、これらの語句を和歌にもつ章段が存在する。

入道「ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを

まして年月思ひたまへわたるいぶせさを、推しはからせたまへ」と聞こゆるけはひ、うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず。源氏「されど浦なれたまへらむ人は」とて、

源氏 旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず

と、うち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、いふよしなき御けはひなる。（小学館・『全集』明石237頁）

いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに、「いかに多かる」などまづ思し出でらるるに、ほれぼれしくて、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり。蜩の声はなやかなるに、御前の撫子の夕映えを独りのみ見たまふは、げにぞかひなかりける。

源氏 つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな

螢のいと多う飛びかふも、源氏「夕殿に螢飛んで」と、例の、古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

源氏 夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり（小学館・『全集』幻529頁）

浮舟 かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばやまじりなば」と聞こえたるを、宮はよよと泣かれたまふ。さりとも、恋しと思ふらむかし、と思しやるにも、もの思ひてゐたらむさまのみ面影に見えたまふ。

まめ人はのどかに見たまひつつ、あはれ、いかにながむらむ、と思ひやりて、いと恋し。

浮舟 つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて

とあるを、うちも置かず見たまふ。（小学館・『全集』浮舟153頁）

明石の巻は、入道の身を捨てての多年の祈願が、実現へと大きく転換していくきわめて重要な章段である。「さいわひ」人といわれる明石の御方の運命は、入道の多年に亘る仏道への帰依と住吉の神の導きとによって開かれていく。光源氏の側からは、貴種流離譚の話型をふまえながら、物語がつむぎ出されていく。「うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず」、『全集』は、「やはり品格がにじみ出ている」とする。それは、ある血筋の尊さからくる風格がほのかに見えていた、というのである。入道は、変り者ではあるが、なかなかの風流人であり、琵琶と箏の名手でもあった。『源氏』全歌数七百九十五首のなかに、「つれづれ」の語をもつ歌は三首であるが、明石の巻の章段は、『伊勢』百七段と重ねること、それを借景に読むことによって、明石入道の風流人としての一面をきわ立たせることができる。やはり物語の作者は、この語を通して、『伊勢』を下に敷きながら、入道を風流人として見事に造形していったのだと思われる。

幻の巻は、光源氏五十二歳の正月から十二月まで、現世に生きる最後の姿が描かれている。次に中世以来巻名だけを残す「雲隠」が置かれている。こういう物語の舞台設定は、既に『大和』の、業平臨終の六十五段を連想させていく。野村精一氏（「源氏物語作中歌論(一)」『源氏物語の思想と表現　研究と資料』古代文学論叢第十一輯　武蔵野書院）は、幻の巻の光源氏の全歌十九首を紫上追慕を主題とする挽歌群として捉え、その構造を、「源氏と紫上の共有した〝時間〟のすべてに立ちあうこと」（261頁）になるものと解された。第九首目の「つれづれと我がなきくらす」姿に、業平臨終の日の歌「つれづれといとど心のわびしきに」を重ね、それを借景に解することによって、亡き紫上への思いをいよいよつのらせていく第十首目の、

夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

の歌が詠まれていく心情を、きわめて自然の心の流露として理解することができる。そこには、恋に苦悩する光源氏像、絶ち難い絆と煩悩とにさすらう、恋に生きる光源氏像が、『大和』の業平像に重ねられ、主人公の死を暗示するものとして語られている。物語享受のたのしさを、そういう高い次元の知的な「遊び」、いわば、知的な離れ技を通して読者に読ませていこうとしている。そして、それは『大和』の一つの物語享受の方法でもあった。光源氏の晩年は、『伊勢』や『大和』の業平像の晩年を借景に、それに重ねながら読まなければならないことを、『源氏』の作者は、「つれづれと」の歌のなかに、謎のように秘め、隠していたのである。そのように解することによって、幻の巻巻末の描写と完全に照応する意味を読んでいくことができる。そういう作者の意図を探りながら物語をよんでいく「たのしさ」は、作家の手を離れた作品が大量に印刷・配布され、一人歩きしてしまう現代のメカニズムの中で育って来た研究者には、享受できにくくなっていることのように思う。物語は、「場」を考えなければ理解できない文学だと思う。それは、「座」というような言葉を連想させていく、そんな意味をもっている。このように考えてくると、幻の巻の光源氏像は、

『大和』の業平像を重ねることによって、見事に造形されていることの意味がわかってくる。

明石の巻、幻の「つれづれと」の語をもつ二首の歌のなかに、それぞれ『伊勢』と『大和』の世界を借景とする見事な物語の造形を享受してきたのであるが、三首目の浮舟の巻に至って、その妙なる造形に眩惑される思いがする。光源氏は、事定まれる中にも、何か一筋の風雅の趣を添えることに腐心した。それは、当時の女性達の教養、学問を超えた有識故実、史書にもきわめて造詣の深かった物語作者の、生き方とも深く関わる発想のようにも思われる。浮舟の巻の歌が、『伊勢』百七段の「つれづれのながめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし」「かづかづに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」の歌を踏えていることは、小学館『全集』一五三頁の頭注を引くまでもない。だが、既に「つれづれ」の語をもつ歌を、二つの異なる類型的発想をもつものとして捉え、享受すべきことを論述してきた。『全集』のような注釈書の類に従えば、それは、やはり『伊勢』の世界の伝統を承け継ぐものと解すべきもののように見える。しかし、浮舟物語は、浮舟が既に死を決意する物語へと大きく展開していく。「うちも置かず見たまふ」(153頁)を『全集』頭注は「薫は歌のできばえに満足するが、その苦しい心は察していない」とする。総角の巻の大君臨終の物語でも、やはり薫は大君の心情を理解できず、その真情を垣間見ることとさえ出来ないままに、その周縁をさすらう人に過ぎなかった。浮舟の心情や真情を理解し、愛することにおいてもそれは一般であり、薫は、そういう意味では錯誤の人であった。それは、登場人物の意識の枠外、次元の外でなされている。そして、そこには、宗教的な救済の世界を渇仰しながらも、救われ得ない薫像の造形が見られる。そして、それは、八宮に対しても同様であった。それとは対蹠的に、大君の死後の顔の安らぎと美しさ、浮舟の出家後のある一つの主体的、自律的な生き方のなかには、女人であるゆえの罪障の世界は見られない。

浮舟の巻の「つれづれと」の歌は、『伊勢』と『大和』の、二つの異なる類型的発想を隔合し、浮舟の死への思いを

暗示させ、あい寄ることのできない孤独な魂のさすらいを、逆説的に詠いあげていったのである。そういう意味では、やはり浮舟の巻の「つれづれと」の歌による造形は、実にみごとであるといわざるを得ない。「つれづれ」の語をもつ和歌が、このように深い意味をそのなかに秘めてきたのは、それが文学作品や芸術作品の創造や享受の場と深く関わる意識を持っていたからである。その一端を、次のような記述の中に見ることができる。

(1) つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ、手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などに、さまざまの絵どもを書きすさびたまへる、屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり。（源氏須磨・小学館『全集』191頁）

(2) この草子は、目に見え心に思ふ事の、よしなくあやしきも、つれづれなるをりに、人やは見むとするに思ひて書きあつめたるを、あいなく人のため便なき言ひ過ごししつべき所々あれば、いとよく隠しおきたりと思ひしを、涙せきあへずこそなりにけれ。（枕草子・小学館『全集』465頁）

(3) もとも心ふかからぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきことも目とどまりて、御返、今日のまの心にかへて思ひやれながめつつのみすぐす心を（和泉式部日記・小学館『全集』（87頁）

(4) あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。（更級日記・『全集』283頁）

（未完）

――付記

「「おのがいとめでたしと」再論」は、元年10月22日、中古文学会秋季大会で研究発表したものをまとめた。今井源衛、鈴木一雄両氏から貴重な助言をいただいた。また学燈社「国文学」(平成2年1月号)「学界時評」で菊田茂男氏からご指摘をいただいた。ともに深く感謝申しあげる。

「「つれづれ」の語をめぐる論」は、元年7月26日、長野県上伊那老人大学で「文学と人生」と題して講演したものをもとにまとめた。矢沢先生をはじめ関係各位のご配慮を添うした。深く感謝申しあげる。